

関わった人たちの声

Q.1

テクノロジーを導入するに至るまでの経緯、きっかけは何でしたか？

テクノロジーの進化はヒトを無条件に幸福にするのか？テクノロジーとアートと障害者との出会いは明るい未来をつくるのか？ そうだといけれどそんなに単純じゃないかも……。障害福祉に関わってきたダンスアーティストかつALS重度身体障害当事者として、そんな感情と懸念がありました。領域横断的に自由な実験と議論ができ、今後同様のプロジェクトにもヒントが残せるのでは……と期待して参画しました。



新井 英夫

体奏家、ダンスアーティスト

2022年夏にALS（筋萎縮性側索硬化症）の診断を受ける。以降、対処療法を続けながら、日々即興ダンスをし、各地でのワークショップ活動を発信している。

Q.2

一緒に取り組む人との関わり方において、特に意識したことはありますか？

何らかの装置や仕掛けを使ってみる場合、ずらしてみる。マニュアルにないやり方で、違う目的で、ひっくり返したり、入れ替えたり、踊ってみたり、歌ってみたり、いろいろやる。遊んでみる。開発者は、障害のある人が使うことを想定していないかもしれません。こんなこともできますよ、ここがやりにくいですよ、と対話できればいい。

表現をテクノロジーでサポートしたい場合、まずはメンバーで、あえてサポートなしでやってみる。意外とできることはある。繊細さ、弱さが面白くなることもある。態度、思い込みを変えることから。テクノロジーはハイテクとは限らない。ローテクだからこそ、関わりやすいこともある。それさえあれば、という万能なものではなく、それと共に表現を探っていく。



佐久間 新

ジャズ舞踊家

アートセンターHANAで2004年から即興ダンスに取り組み、2011年から定期的なプログラム「ひるのダンス」をはじめ、「かけ」や「水」などをテーマに、障害のある人の身体表現や、ダンスの可能性を広げている。

Q.3

テクノロジーを導入し、使い方を試行錯誤する段階では、どのようなことを意識していましたか？印象的なことは何でしたか？

場のなかで即興的に生まれる身体表現に対し、技術者として関わる自分も可能な限りその流れのなかで即応的にテクノロジーを生み出したという思いがありました。そのうえでテクノロジーは、適度な制御を施しつつも、その振る舞いの一部を場や素材の偶発性に委ね、身体による介入や改変を積極的に受け入れ、予想を超えたインタラクションや動きへとつながる「余白」を有するものでありたいと取り組みました。



寛 康明

インタラクティブメディア研究者、アーティスト、東京大学大学院 教授

テクノロジーの関わり方や、身体表現と鑑賞方法の可能性を一緒に探ってほしいと依頼を受け、「とけていくテクノロジーの縁結び」の3人の即興ダンスパフォーマンスに技術者として加わる。

Q.4

今回の試みをほかの場所へと展開していくために、何が必要だと思いますか？

結論やわかりやすさにこだわらず、物事の起こりやプロセスを捉えながら、プロジェクトに携わる当事者の視点・思いと一緒に振り返られるものを残すこと。興味・関心がない人を振り向かせるのではなく、すでに関心を向けている人たちにとって必要な映像の力は何かを考えることが大事だと思います。



丸尾 隆一

ビデオグラファー

フリーランスのフォトグラファー/ビデオグラファー/映像ディレクターとして、アートや教育分野に関するプロジェクトに関わる。公開実験ワークショップ「とけていくテクノロジーの縁結び」の映像撮影・編集を担当。